

## 野外巡検「大河津資料館と治水工事最前線」

新潟の川や治水を語るとき信濃川と大河津分水は欠かせません。信濃川は私たちの暮す広大な越後平野をつくり、生活と社会の発展になくてはならない水の恩恵と潤いのある自然環境を育む一方で、度々水害が発生し、越後平野の歴史は水害とのたたかひの歴史でもありました。

今回の巡検は、信濃川と越後平野の治水の要である大河津分水路。そこで行われている可動堰改築工事と平成 16 年 7 月 13 日の水害で大きな被害を受けた刈谷田川・五十嵐川の災害復旧工事から、水害と治水について考えました。

参加者は 39 人、マイクロバス 2 台での巡検となりました。

### ■巡検ルート

①刈谷田川災害復旧工事現場（長岡市中之島地域）→②大河津資料館→③大河津分水路可動堰改築工事現場→④洗堰【昼食】→⑤横田切れ破堤地点→⑥中之口水門・蒲原大堰→⑦五十嵐川災害復旧工事現場

### 7.13 災害復旧工事（刈谷田川・五十嵐川）

日本海から新潟県にかけて停滞した梅雨前線に暖かく湿った空気が流れ込み前線が活発化し、中越地方に大雨を降らせました。長岡地域と三条地域では 12 日の夜から 13 日夕方にかけて激しい雨が降り、降り始め（12 日 19 時）からの総降水量は笠堀ダム観測所で 486mm、刈谷田川ダム観測所で 433mm を観測するなど記録的な大雨で、刈谷田川、五十嵐川で護岸・堤防の決壊、破堤、溢水、道路の冠水、住宅の全半壊・浸水など大きな被害が発生しました。

県では災害復旧事業に全力で取り組んでおり、平成 20 年度の完成を目指して大規模な工事が行われています。

現場では、長岡地域振興局災害復旧部及び三条地域振興局五十嵐川改修事務所の担当職員の方から詳細な説明を受け、改めて水害の恐ろしさ、治水事業の大切さを感じました。

なお、刈谷田川は延長 26.7km 事業費約 480 億円、五十嵐川では延長 3.9km 約 363 億円とのことでした。



写真 1 刈谷田川破堤地点での説明と仮復旧護岸



写真 2 五十嵐川災害復旧工事と事業説明の様子

## 信濃川大河津資料館

大河津資料館は信濃川と越後平野のなりたちや人々のくらしと風土、大河津分水の歴史や技術について深く学ぶことのできる施設です。当日は、館長補佐の樋口さんの案内で詳しく見学することができました。

大河津分水の役割がよく理解でき、大河津分水があるからこそ今の新潟がある。新潟県における最大の社会資本と感じました。



写真3 資料館で樋口さんの説明を聞く

## 可動堰改築工事

可動堰は昭和6年に自在堰の陥没・倒壊により建設された堰で、70年以上の歳月がたち、老朽化が進み、安全性が低下し洪水に耐える新たな可動堰が必要とされ、洗堰の改築に続き「大河津可動堰改築事業」が国土交通省北陸地方整備局信濃川河川事務所により平成25年の完成を目指して進められています。



写真4 新可動堰は可動堰の下流に河道を変えて築造される。(大河津可動堰改築事業パンフレットより)



写真5 新可動堰の基礎工事

## 横田切れ、蒲原大堰と中之口水門

明治29年(1896)年7月、旧分水町横田の堤防が切れた大災害「横田きれ」は破堤した下流域18,000haの土地が泥海となり、大河津分水工事を決断するきっかけとなった洪水とのこと。破堤した箇所には記念碑が建てられています。なお、分水工事により信濃川は狭められ、現堤防との間は広大な田が広がっていました。

信濃川と中ノ口川の分流点に信濃川には堰が、中ノ口川には水門が設けられています。信濃川の洪水を適正に分配するもので、これらの施設により信濃川下流の治水が図られています。

写真6

横田切れ  
破堤地点



写真7 蒲原大堰と中之口水門

蒲原大堰  
(信濃川)

(中ノ口川)

天候にも恵まれ充実した巡検でした。ご案内頂いた方々に感謝します。(文責：小川幸雄)



## 飯川健勝・新潟県中越沖地震調査団